京都吉田・黒谷界隈における道に着目した景観研究

京都大学大学院　学生会員　○出村嘉史
学生会員　相川裕一
京都大学大学院　正会員　川崎雅史

１．研究の背景と目的

京都の吉田山と紫雲山は、盆地の中に並ぶ小高い独立丘である。この一帯は吉田神社、金戒光明寺、真如堂を始めとする宗教文化に基づく領域が、変化に富んだ地形の上に構成されており、現在ではこの一帯が非常に居心地の良い身近な散策路として多くの人に親しまれている。本研究の目的は、このような吉田・黒谷界隈に生成してきた道に着目し、その経路の原形と地域の微地形との関係を分析することにより、地域全体に渡る景観特性を明らかにすることを目的とする。

本研究対象地の吉田山（神楽岡）、あるいは東山一帯を扱った研究には、都市とのつながりを探ろうとするものや、建築様式を見出そうとするものなど、多岐に渡る蓄積が見られるが [1]、本研究は、史料に基づいて敷地構成のルーツを把握し、地域全体の道に着目して、一般には捉えにくい丘陵地を含む広域的な一つながりのランドスケープの構成を解明する点に新規性がある。

２．絵図からみる道の原形

この地域の全体像を捉えつつ、道の平面構成を発達的に分析するために、現在の道の骨格が出来上がりつつあった近世から現在までの地図、あるいは洛中洛外図や名所図絵などの絵図から得られる情報を分析した。

(1)　街路網の原形

蒐集した地図（**図１**等）の中から、道の構成が分かりやすいものを取り上げて [2]、それぞれに描かれている道が実際にはどのような構成であったのかを、時代毎に相互比較して、推定した。

(2)　参道

これらの街路網は、各部で周囲の宗教的領域へ導入される。明らかに境内地である経路（参道）の原形を、現在のものと近世の絵図 [3]（**図２**等）に認められるものから抽出した。

(3)　参道の延長としてある街路

以上より明らかになった原形としての経路を**図３**に示す。参道とその他の主要街路網を併せて見てみると、宗教的領域においては経路の折れ曲がりや分かれが多いというように、線形変化の密度に差はあるけれども、概ね全域を通して連続性を持っている事がわかる。つまり、近世においてこの地域の核をなしていたものが宗教文化領域（境内境外地）であり、参道、あるいは境内を結ぶ道が、経路の主要なものであったと思われる。街路にも参道的な機能が、参道にも交通の機能が備わっており、この区別は曖昧であったと言える。

図１　近世中頃の敷地構成（元禄十四年實測大絵図）

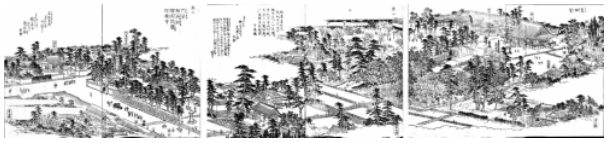

図２　近世の真如堂境内（花洛名勝図絵）

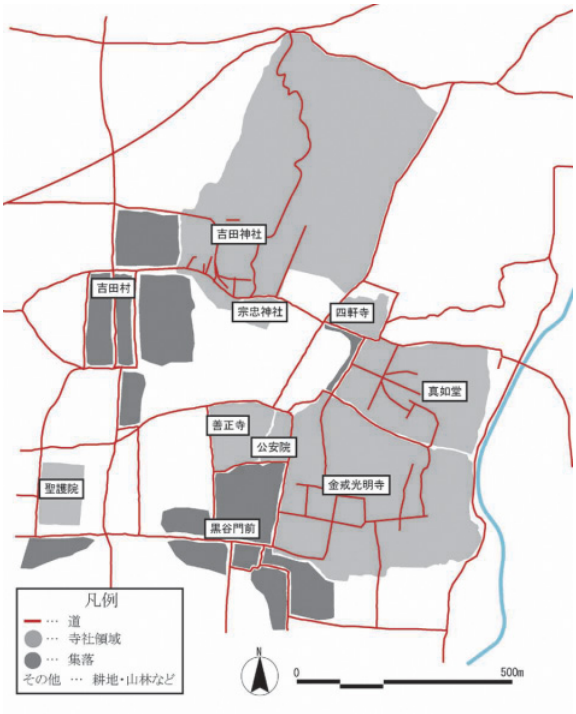

図３　吉田・黒谷界隈における道の原形（筆者作成）

Key Words：　景観調査・分析、丘陵地形、京都吉田山・黒谷、空間整備・設計

〒606-8501　京都市左京区吉田本町　京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻　Tel＆Fax 075-753-5123

３．地形と線形の兼ね合い（幾何構造の特性）

前章において明らかになった経路網は、丘陵地を核とするこの地域において、どのように地形と関わっているのだろうか。地形と道の線形との関わりを判断するために、まず等高線マップおよび地形３Ｄモデルを作成し、そこに先の**経路網**を重ねた（**図４**）。これにより、一つ一つの道が、地形の中でどの部分を走っているのかを明らかにすることが出来た。すなわち、道は谷間に集中し、谷線に沿って走り、参道の機能を持つ道は、この流れと辻を作り、谷から山へ、平地から傾斜地へと、高低が変化する方向へ走っている。

この構図に則り、江戸末期に建立された宗忠神社の参道が、明治初期には真如堂の参道と一直線（断面ではU字型）をなして繋がった。二つの異領域が地形と参道を通じて一体となり、この道が二つの丘陵の谷間に強烈な個性を加えた事は明らかである（**図５**）。

４．道景観がつくる地域の固有性

これらの主要な経路に沿って、付随する景観を調査すると、道が乗る地形の変化に合わせて周囲の景観が変化する事が分かる（**図６**）。つまり、吉田山、紫雲山といったこの地域の固有性を形成している主要な丘陵地形のみならず、それらの稜線の上へ連続的に取り巻く東山連邦が大きな存在感を持っている。

この結果より、丘陵地形に支配されたこの地域において、道に沿って移り変わる景観は、まさに多様であると言えるが、それでもこの地域を一つのランドスケープとしてまとめる事に成功しているのは、特に次の３点に依る事が判った。つまり、**(1)**丘の上の宗教領域、それらへの参道を含めて間をつなぐ街路網という配置の判りやすさ、**(2)**地形の褶曲と視線対象（森や集落や宗教的建築物など）が生み出す迷宮性、**(3)**遠景のランドマークの存在によって、豊富な多様性の中に一貫したテーマを持っていた。

５．結論

周囲の宗教文化によって決定された経路の幾何構造は、まさにこれらの宗教文化領域の敷地を決定した主要要素の一つであった地形によって、その性格が決定されていた事が判った。地域全体はこれらの経路構成によって大きく性格付けがされていた。近代以降、この地域に発達した集落は、基本的にこの経路構成に合わせて発達しており、今日に至っても独特の地域性を創出しているものと考えられる。

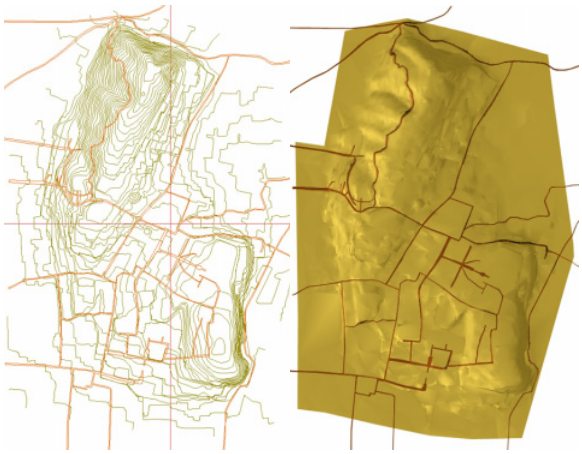

図４　地形と経路網（筆者作成）

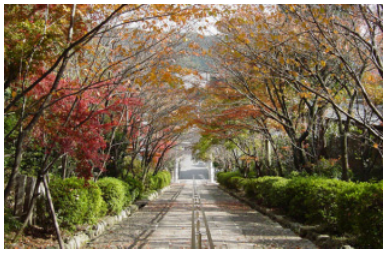

図５　宗忠神社参道から真如堂を望む

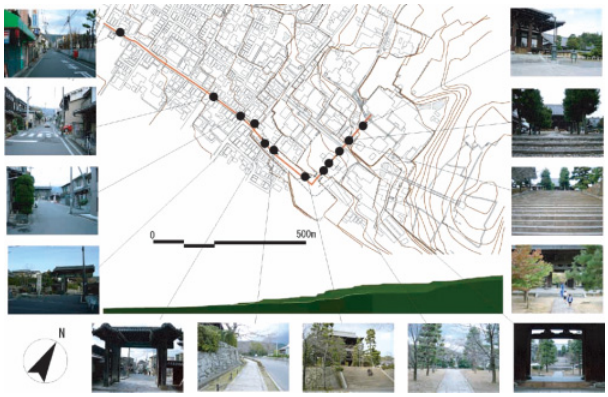

図６　経路に付随する景観（筆者作成）

[1] 中川等：近代京都における住宅の発展に関する考察，京都大学工学部建築学科卒業論文，1980.3/矢ケ崎善太郎：近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情，日本建築学会計画系論文集 第507号，pp.213-219，1998.5／中嶋節子：近代京都における市街地近郊山地の「公園」としての位置付けとその整備，日本建築学会計画系論文集 第496号，pp.247-254，1997.6／山田圭次郎：多層認識モデルによる敷地の研究，土木計画学研究・講演集 No.23(2)，pp.605-608，2000.11 他

[2] 大塚隆：慶長昭和京都地図集成、柏書房／都市計画京都地方委員会：京都３千分１地図、1922-1929／大日本帝国陸地測量部：地形図「大文字山」、1940-1951／京都市参事会：京都市地図、1895／参謀本部陸地測量部：地形図「京都」、1889 他

[3] 都名所図会、1780／都林泉名勝図会、1799／花洛名勝図会、1862／京都府庁文書「社寺境内外別取調」他